かじか

令和２年１０月２９日
岩国市立美川小学校

学校地域連携カリキュラムの意義

校　長　　村　重　　忠

コミュニティ・スクールの取組推進において、山口県内の各学校では「学校地域連携カリキュラム」作成が推奨されています。本校でも、美川観音太鼓、河山学習、かじかの里ウォーキングと併催の校内持久走大会などをこのカリキュラムに位置づけ、教科等の授業の一環として行うことにより、地域と連携した教育の推進に役立てています。

では、どうして今、地域と連携した教育が必要なのでしょうか。

私は約３０年前、国際理解教育の指定を受けた学校に勤務したことがあります。「国際化社会に生きる人間の育成を・・・」という命題の下に研究を３年間行ったわけですが、その中で外国人との交流行事の企画を任された経緯もあって、「国際理解なのだから外国を知ればよい」という考えで、美和町と交流しておられたフランスの交流団にお越しいただいたり、当時周東町の三瀬川地区にあった日本語学校の学生（中国人）との交流を行ったりと、交流会の開催に奔走したのを覚えています。日頃外国人と触れ合う機会のほとんどない勤務校の児童にとっては、外国の文化や人と触れる貴重な機会となり、私たち職員も外国の風習について発見することが多々あって、これはこれで意義ある取組だったと思い返します。

その折､先進校視察として熊本県宇土市のある小学校を視察する機会を与えていただきました。駅に降り立つと教頭先生が出迎えてくださり、学校へ到着すると校長先生から直々に案内や説明をしていただき、その後は駅まで送っていただくなど、親切に御対応いただき感激したのを覚えています。

さて、国際理解教育を研究しているのだから外国のことについての学習や学校環境が整えられているのかと思って学校に入ると、そうでもありません。ある程度の外国のグッズが展示されてはいましたが、至って普通に整理・整頓された美しい学校だったと記憶しています。

そんな中、校内のあちこちに以下の言葉が掲示されていました。

「宇土を知ろう、日本を知ろう、世界を知ろう」

校長先生が案内の中で何度も繰り返しておられた言葉です。

「世界を知るためにはまず郷土を知ることだ。自分の住んでいる地域の良さを知らないで外国の良さを理解できるわけがない。」

学校に帰ってから、地域学習の大切さについて復伝したことは言うまでもありません。

コミュニティ・スクールの目的の一つに地域興しがあります。学校地域連携カリキュラムに沿い、地域の教育力を学校に取り入れ、或いは学校が地域貢献をしていく中で地域にもっと元気になっていただくことはもちろんですが、国際化の中で生きる人間の育成のためにも児童がまず地域をもっと知ること、そのためのツールとしての学校地域連携カリキュラムが存在しているのだとすれば、それはたいへん意義あることだと思いますし、当時訪問させていただいた学校の校長先生の力強いお言葉

「世界を知るためにはまず郷土を知ることだ。自分の住んでいる地域の良さを知らないで外国の良さを理解できるわけがない。」

にも裏付けられていると思っています。